

## 【プレスリリース】

### 浸透性殺虫剤タスクフォースによる 2017 年のネオニコ評価書日本語版を発表 生物多様性と生態系への甚大なリスクが明らかに

2019 年 10 月 31 日

ネオニコチノイド研究会

ネオニコチノイド研究会は、国際自然保護連合 (IUCN) に助言する「浸透性殺虫剤タスクフォース (TFSP)」が取りまとめた、『浸透性殺虫剤に関する世界的な統合評価書(WIA)更新版』日本語版を 2019 年 10 月 31 日に発表した。本評価書の原文は、浸透性殺虫剤による生態系への脅威に関する新たな情報が、世界で最も網羅的で科学的な総説の最新版として科学雑誌『Environmental Science and Pollution Research』に 2017 年から 2018 年に掲載されている (下記日本語版 PDF の冒頭に原著へのリンクを記載)。これは、2014 年以降発表された 500 余りの研究を、農薬メーカーが資金の提供元である研究も含めて統合し、浸透性殺虫剤として欧州で使用されるフィプロニルにも言及している。

『浸透性殺虫剤に関する世界的な統合評価書(WIA)更新版』

▼[表紙・目次](#)

▼[第 1 部「新規の分子、代謝、動態、および輸送」](#)

▼[第 2 部「生物と生態系への影響」](#)

▼[第 3 部「浸透性殺虫剤の代替手段」](#)

▼[全体版をダウンロード](#)

ネオニコチノイド系殺虫剤 (以下、ネオニコ) はごく少量で毒性を表わす。水溶性で土壌残留性が高い (すなわちなかなか分解されない) ため、土壌中および水環境において生物は持続性かつ慢性の曝露を受ける。広範で反復的なネオニコの農業使用は大規模な環境汚染をもたらし、生物多様性に無視できない影響を及ぼす。

ネオニコは、ハチの急激な減少だけでなく、私たちの食品システムの汚染を引き起こす可能性がある。同じく浸透性殺虫剤であるフィプロニルは、欧州連合 15 カ国とスイス、香港で販売されている卵製品から高濃度で検出された有毒殺虫剤として、欧州で食品安全スキャンダルの的となった。

更新された評価書によれば、ネオニコは生物多様性、生態系、生態系サービスの脅威として世界的に大きな影響を与えている。1990 年代に登場したネオニコは、今や世界で最も大量かつ広範囲に使われている。農業使用には、種子処理、土壌処理、葉面散布、芝草栽培などの製品が含まれる。ネオニコは林業、ペットのノミ取り、家庭や商業施設の芝生ケア製品にも使われている。

「今回の新たな知見は、浸透性殺虫剤の大規模使用、とりわけ種子処理剤としての予防的な使用を早急に中止する必要性を再確認するものである」。フランス国立科学研究センター研究員で、TFSP 副委員長長のジャン・マルク・ボンマタンは言う。「これらの農薬の使用は環境面で持続可能な農業の実践に逆行する。農家に何ら利益をもたらさず、土壌の質を低下させ、生物多様性を損ない、水質を汚染する。もはやこの破滅への道を歩み続ける理由はない」

この報告書は、新しいデータを吟味した三つの論文、第 1 部：新規の分子、代謝、動態、および輸送、第 2 部：生物と生態系への影響、第 3 部：浸透性殺虫剤の代替手段から成る。

「害虫と闘うには、ごく少量の農薬で事足りる。大半は単に環境を汚染し、非標的生物に広範な害を及ぼすだけである」。カナダのゲルフ大学地理環境幾何学部准教授のファイサル・ムーラはこう述べる。

2013 年に欧州連合は、ハチを誘引する作物に対するイミダクロプリド、クロチアニジン、チアメトキサムの特定の使用についてモラトリアムを課し、2018 年 12 月、屋外の全面使用禁止を施行した。フランスでは、2018 年 9 月にクロチアニジン、イミダクロプリド、チアメトキサム、チアクロプリド、アセタミプリドが全面使用禁止となっている。

「総じて、ネオニコを用いた地球規模の実験は、害虫防除の明らかな失敗例である」とボンマタンは言う。「世界中の政府は、フランスに続いてネオニコを禁止し、持続可能な総合的害虫管理モデルへと速やかに移行すべきである」

本評価書の要旨は、別紙「[浸透性殺虫剤に関する世界的な統合評価書\(WIA\)更新版 日本語版要旨](#)」を参照ください。

詳細な情報、インタビュー申込みは下記にお問い合わせください：

ネオニコチノイド研究会 平久美子(浸透性殺虫剤タスクフォース公衆衛生グループ座長)

tfsp.phwg@gmail.com

### 浸透性殺虫剤タスクフォース

浸透性殺虫剤タスクフォース (<http://www.tfsp.info>) は、国際自然保護連合の要請を受けた独立系科学者の国際的なグループで、ネオニコチノイド系殺虫剤の生物多様性および生態系への影響に対する地球規模の懸念に対して科学界が応えたものである。

同タスクフォースは 2015 年、世界で初めてネオニコチノイドの生態系影響を網羅的・科学的に評

価した『浸透性殺虫剤の生物多様性と生態系への影響に関する世界的な統合評価書(WIA)』を取りまとめた。この画期的な総説では、1100 以上の査読付き論文が、農薬製造メーカーによるものも含めて検討された。ミツバチと他の多くの益虫、すなわち食物連鎖の出発点である水生昆虫や土中のミミズなどの無脊椎動物、一般的鳥類への明らかな悪影響(カスケード効果)について、明らかな証拠があることを見出した。